令和７年度広島大学附属東雲中学校
授業実践シート

生活単元学習
しののめベジタブル作戦

～生徒の「願い」を原動力に
人との関わりの中で考える力を育てる～

特別支援教育　高木 由希

キーワード

- ☐ 特別支援学級（知的障害）
- ☐ 生活単元学習
- ☐ 中学校特別支援学級
- ☐ 野菜の栽培
- ☐ 他者との関わり
- ☐ 協力

単元設定の理由と実践のポイント

・１年時には、生活単元学習にて花の栽培を経験。

・水やり等の当番活動には概ね取り組むことができる一方で、単なる作業となっている面も見られた。

・日々の学校生活において「こうした方が良いかな」と思うことがあっても、自信のなさからか、言い出せずに固まってしまうことが多い。

単なる当番活動だけでなく、状態等の観察が必要となる「野菜の栽培」を主軸に、人との関わりを通して生徒の「考える力」を伸ばしたい

実践のポイント

生徒にとって“自分ごと”となる学習活動の設定

校内の様々な人との「かかわり」を広げる

生徒の同士の「つながり」を待つ支援

単元を通してめざしたい子どもの姿

書籍やインターネット等の情報から、
必要な情報を読み取ることができる姿

考えや気付きを適切な方法で
相手に伝わるように表現する姿

活動の意味や意図を理解し、
仲間と関わり、粘り強く活動する姿

単元の流れ（年間）

夏野菜

作戦会議
- 目的の共有
- 作戦名を考える
- 野菜決め
  （アンケート作成・集計）
- チラシづくり

栽培の準備
- 土づくり
- 苗の買い物
- 苗植え
- 看板づくり

栽培/観察
- 水やり
- 草抜き
- 観察
- 野菜通信（掲示）

収穫/配付
- 収穫
- 個数の記録
- 野菜配り

冬野菜

作戦会議
- 目的の共有
- 作戦名を考える
- 野菜決め
- チラシづくり

栽培の準備
- 土づくり
- 苗の買い物
- 苗植え
- 看板づくり

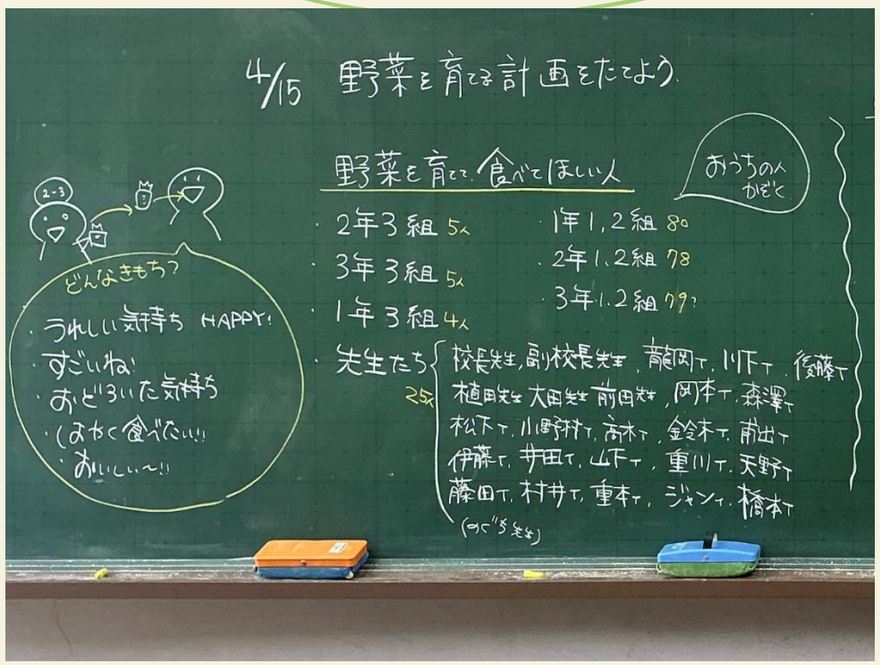
栽培/観察
- 水やり
- 草抜き
- 観察
- 野菜通信（掲示）

収穫/配付
- 収穫
- 個数の記録
- 野菜配り

実践ポイント①

生徒にとって“自分ごと”となる学習活動の設定

「なぜ・なんのために」を一緒に考える



・単元導入時には「野菜を育ててどうしたいか」を生徒と一緒に考え、生徒や先生方、保護者にプレゼントをして食べてほしいという願いを共有した。

・昨年度の花の栽培に続いて『野菜を育てて東雲のみんなをHAPPYにする』という願いをもとに活動していくことを確認した。

・自立活動で学習していた気持ちの言葉と関連させ、野菜を受け取った人がどんな気持ちになってほしいかの具体を考えた。生徒からは「うれしい気持ち」「おどろいた気持ち」「早く食べたい！」といった野菜を受けとった側の気持ちを語る姿があった。

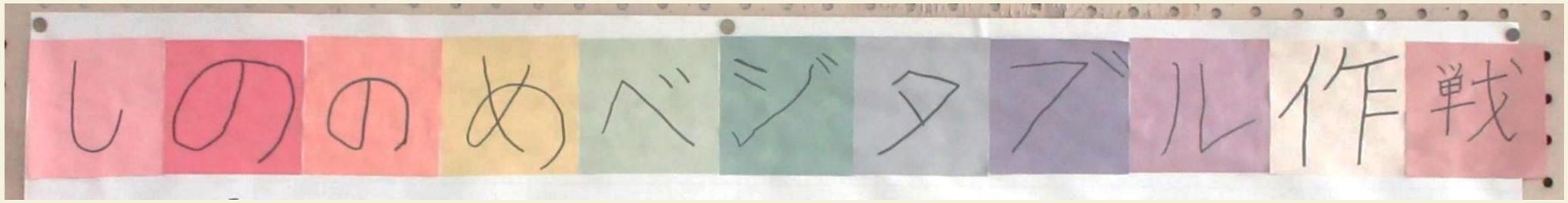
実践ポイント①

生徒にとって“自分ごと”となる学習活動の設定

作戦名（単元名）・合言葉を生徒と考える

・野菜を育てる活動については、生徒がアイデアを出し合い、
『しののめベジタブル作戦』と名付け、『しのベジ』という愛称とした。

・日課表や連絡帳の学習内容に「しのベジ」と書くことはもちろん、
日々の学校生活の中で「来週、しのベジしますか？」等と活動に見通しを
もったり楽しみを見出したりする姿が見られた。



実践ポイント②

校内の様々な人との「かかわり」を広げる

通常学級の生徒や先生方とのかかわり

・育てる野菜を決めるためのアンケートは、通常学級の生徒や先生方を対象に配付・回収して、単元導入時に共有した願いを実現できるようにした。

・野菜通信（掲示）の作成や、畑作業をしていることを知らせるチラシ作りを通して、自分たちの取り組みを校内に知ってもらうきっかけとした。

・野菜の配付を通して、自分たちの学び（どのように育てたのか等）を自分の言葉で伝えて認めてもらうかかわりにより、単元導入時の願いが実現している喜びを生徒自身が感じられるようにした。

実践ポイント②

「かかわり」を広げる学習活動の設定

大人の力を借りる・助けてもらう経験

・野菜の栽培に必要な土や鳥よけのネットなどは、校内の環境整備員の皆さんにお借りした。

・環境整備員さんとは、これまでも職場体験学習でお世話になったり、特別支援学級の先輩が勤務をしていることもあり身近な存在である。

・一緒に道具を使わせてもらい、声を掛けてもらうことを通して、自分たちの学習が様々な人に支えられていることを知るきっかけとなた。

実践ポイント③

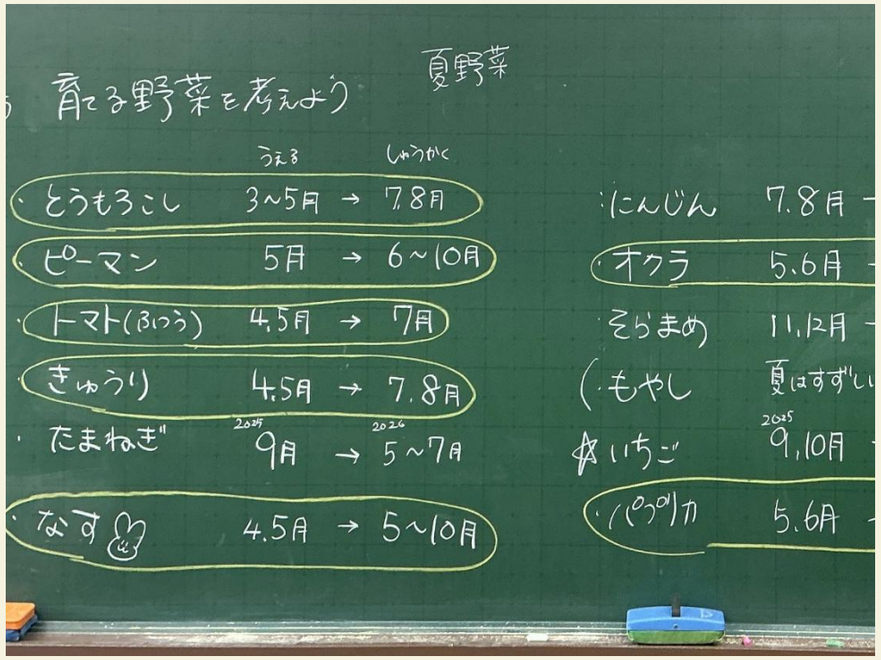
生徒同士の「つながり」を待つ支援

情報を読み取り、共有する

・野菜によって種まきの時期や収穫の時期が異なることを植物の図鑑を使って情報を整理し、育てる野菜を選定する活動を行った。

・情報が紙面に整理されている「図鑑」を使用したことで、種まきや苗植えの時期、収穫時期を比較しやすくなり、「ここ見たらいいよ」「このマークだよ」と生徒同士で教え合う姿が見られた。

・育てたい野菜がある一方で、活動できる時期やプランターでの栽培といった条件をもとに、必要な情報を読み取って選択していた。
また、こうして選択した野菜の一覧が野菜を決めるためのアンケート作成につながり、野菜の選定理由について自分の言葉で説明する姿が見られた。



実践ポイント③

生徒同士の「つながり」を待つ支援

生徒の「選択」と「決定」に任せる

・活動の役割分担決めでは、これまでの学習経験や生徒同士の関係性も踏まえ、生徒同士で考え選択し、決定を任せる場面を多く設定した。

・時には、自分の希望がかなわずに気持ちを切り替えることができなかったり必要以上にお互いに気を遣いすぎたりと生徒それぞれの課題が見られる時もあったが、見守りに徹することとした。

・十分な活動時間の確保や繰り返しの活動設定により、うまくいかないことも、もう一度チャレンジすることができ、生徒自身が経験をもとに自分たちでアイデアを出し合って考える姿が増えた。

実践ポイント③

冬野菜の栽培に向けて準備活動での生徒の様子 改善を繰り返し、仲間を気遣う姿

底石チーム

底石の入った袋に絡まった根を落としていく作業を２人で担当。何十と袋がある中、ふたりでシャワーを持ち、交代で何度も水を掛けることを繰り返す。

「このままでは時間内に作業が終わらない」「作業が進まない」と考えた生徒が、シャワー係と袋を持つ係に分かれることを提案し、少しずつ作業スピードが上がっていく。

休憩していた「土ふるいチーム」が「底石チーム」の作業の進捗状況を気にして、声を掛けに行く。また、休憩時間をとることを促す。
お互いに決めた時間となると、また作業に戻っていく。

土ふるいチーム

根や大きな草や葉が入った状態の土をふるいにかける作業を２人で担当。とにかく土をふるいにかけ、容器にいっぱいにしていくが、重すぎて容器をひっくり返すことができない状態となる。

２人で無理なくきれいにした土を容器から返すことのできる量を容器の半分以下であると相談・調節して「そろそろいい？」等と声を掛けあい、作業を進めていく。「何分までやろう」等と休憩のタイミングも自分たちで決め始める。

成果と課題

・生徒と一緒に願いを共有したり作戦名（単元名）を考えたりする活動により生徒自身が主体的に活動に取り組む姿が多く見られた。

・生徒の活動の様子を様々な形で校内に発信することを通して、最初は本学級からの一方的だった関わりが、双方向のかかわりへと変わっていった。

・安心して活動できる環境において、生徒が自分たちで考え、工夫し取り組む学習の積み重ねにより、生徒同士の関係が変容するとともに、学級集団としてのまとまりも高まっていく様子が見られている。

・年間を通した単元設定により、生徒の体験を活かしながら学習活動を発展させていくことができる一方で、単なる活動とならないよう、生徒の実態やその時々の課題や関係性を踏まえたうえで支援を検討していく必要がある。

・合言葉としてよく用いる「協力」等について、抽象度の高さから「協力する行動」の具体が十分に理解できていないことがあり、言葉掛けの工夫が必要である。